
I S インフィニット・ストラトス ~ 『強さ』の本当の意味~

とある世界の思春期男子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス ～『強さ』の本当の意味～

【Nコード】

N8234Y

【作者名】

とある世界の思春期男子

【あらすじ】

『強さ』の本当の意味を探すため、旅に出た一夏。その答えを見つけた時に待っているのは一体何なのか。それは彼を含め、誰も知らない。それでも世界は大きく動く。その動きはやがて一夏達をも巻き込んでいくことに。だが彼はもう2度と立ち止まろうとはしない。彼の中には、ある強い思いがあるのだから。

第1話 決断の夜

なんだよ……なんでまたこんなこんな目に……。あの『事件』からまだ二年半しか経ってないってのに……なんでまた俺はこんな連中に捕まっているんだよ。

「残念だったわね坊や。良い動きだったけど」

俺を誘拐した犯人の一人。

そいつが俺を見下し、バカにするように笑う。その笑いはたちまち伝染し他の者も笑いだす。本当に自分が自分でも惨めに思えてしまう。

悔しくてたまらないが今の俺は何もできない。腕も足も縛られて口もガムテープで塞がれている。反撃してやりたいけどこれじゃ出来ないじゃないか……。

「でもさすがじゃない？ IS相手にここまでやるなんて」

「織斑千冬の弟ってだけはあるな」

「マジで残念だ。弟じゃ無かったら味方に欲しいぐらいなのにな」

冗談じゃない。

お前らみたいな奴らと同類になるなんてありえない。考えたくもなければもう見たくもない。

だがもしそんな言葉を口にしようものなら

あいつ等が手に持っている凶器で殺されて終わり。

ははは……なんでこんな事になったんだっけ。

俺は自分を罵倒しながら今までの出来事を思い出していた。

「え？俺に今日の試合を見に来てほしいって？」

「ああ。お前も前に一度見たいと言っていただろう？」

珍しい事もあったものだ。

まさか姉さんの方からそんな誘いがくるなんて。

これをもっと表に出していけば結婚の話だって来そうなのに。
本当にもったいないな、姉さんは。

「失礼な事を考えるな。お前が一人前になればすぐにでもしてやる」

「ぐっ……そ、それで時間は何時何分何秒ぐらいですかお姉さま？」

「おお、話を逸らしたな。男なのに」

「……大変申し訳ございませんでした」

「素直で結構。もう失礼な事は考えるなよ」

なんで考えている事が瞬時に解るんだろうか。

しかも相手は電話越しなのに。

もしかして姉さんは人間を止め……止めておこう。

これも読みとられるかもしれない。

「で。試合開始の時刻は？」

「三時三十分からだ。まだ四時間ほど時間があるだろう」

「そうだね。……そうだ、今日の晩って帰ってくる？」

「今日は帰ろうと思っている」

「じゃあ晩御飯の下ごしらえしてから見に行くよ」

言っただけからすぐに行動するのが俺流ってやつだ。

そう心の中で呟きながら冷蔵庫の中を見ている。

……うわ、もうあまり食材とか調味料とかが無い。

これは大量に買っておく必要があるな。

姉さん細い割によく食べてすぐ無くなっちゃうから。

「そうだ……『アレ』はもう完成したのか？」

少し声色を変えて通信してくる姉さん。

その声には心配の色が含まれている。

『アレ』か。

もう一応完成はしてるけどテストがまだだからなあ。
別に持っていく必要もないな。

二年半前のような出来事ももう起こらないだろうし。

「完成はしたけどテストはまだだから持っていけないよ」

「そうか。だったらお前に護衛を」

「姉さん心配し過ぎだつて。もう大丈夫だから！」

大きな声を出してしまったが気にしない。

あの『事件』があつてからの姉さんはしばらくおかしかった。

訓練の最中は目を光らせて周囲に気を配っていたし、風呂に入っているときはドアの傍で身を預けていたし、夜になって寝ている時なんかは時々俺の布団の中に入ってきてたし。

もう過保護を通り越した重度のブラコンになっちゃったし。

……まあ本人の尊厳にかけて周りには言っていないけど。

とにかく姉さんは心配し過ぎだ。

あれから俺は自分の弱さを呪い、強くなろうとしている。もちろんただ強いだけでなく本当の強さを欲して。

「……そうか。そこまで言うのだから大丈夫なんだな」

「うん、だからもう心配しないで」

「……おっと。言うのを忘れてしまっていた」

「何？まだ何か言う事があるの？」

「お前の引きだしの下に隠していた物と天井裏に隠してあつた物を処分した」

カチーン。

俺の周りの時間だけがこの瞬間だけ確実に止まった。

今姉さんは何て言ったんだ？

『お前の引きだしの下と天井裏に隠してあつた物を処分した』って。

それって……弾から譲ってもらった秘蔵のアイテムじゃないかあああああ！！

せつかく苦勞して手に入れたのに！

二万円も払ってまで譲ってもらうほど価値のある代物だったのに！
うおおおおおおおお姉さまあああああああああああああ
ああああ！

さすがにその仕打ちはあるまりですよおおおお！

「私に隠し事など通用しない。もうあんな物を持って帰ってくるな」

「うう……わ、分かりました」

「し、しかしだな。どうしても言うなら別に私がやってやっても」

「お誘い本当にありがとうございました！そのままご退場してくださいー！！」

「お、おい待て一夏！まだ話は終わって「ブツッ」」

「あ、危なかった。実の弟相手に何を言っているんだあの人は」

ブラコンもここまでくると洒落にならないぞ。

それにしてもあの姉さんがあんな事を言うようになるなんて。
バカと。スト。召喚。の吉。明。と同じ感じだな。

……今度誰かに相談しよう。うん、そうしよう。
じゃないと本当に危ないよ、主に自分の身が。
そう考えながらも俺は今日の献立を考えていた。
これからあんな事になるとも知らずに。

今日の成果はまずまずと言った感じに終わった。
値引き商品もたくさん買えたし、新鮮な食材も買えたし。
今月に入ってから結構運がいいよな俺。
出来ればこの運をこのまま保ちつつ生活したいものだ。

「ってさすがにそれは無理か」

少しながらも笑みを漏らす。

現在時刻は午前12時30分ジャスト。

まだ試合開始には3時間もある。

晩御飯の下ごしらえをしてから少しいじってみようかな。
作り終えた2体と作りかけのあの2体を。

「でもその前に夕食だな。久しぶりに鍋でもしようかな」

鼻歌交じりに歩みを進める。

その時だった。

俺が四つの殺気を急に感じ取ったのは。

「っ！一体誰だ!？」

大声を出して辺りを見回す。

そしてすぐに自分の取った行動が迂闊だと悟る。

ここは人があまり通らないような場所で現に今も通行人は俺だけ。
しかも大きな音が鳴っても気付かれない場合が多い。

「うち……さては俺はスーパーから出てくるのを待っていたな。せめて『アレ』があれば。そう思ったのと同時だった。」

「貴様が織斑一夏だな」

「残念だけど違うぞ」

「嘘だな。常人ではそんな殺気は出せん」

「やっぱり俺が狙いだったな。」

「臨戦態勢に入っという正解だったな。」

「……とはいえ相手は二人。」

「こっちは一人で武器も何も……食材しか持っていない。これじゃあさすがに戦えないぞ、冗談抜きで。」

「しかし汚いな。中学2年1人に大の大人が2人も」

「2人？残念だが貴様の読みは外れている」

「何だと？お前らはどう見ても2人しか」

「ここにいるのよね、私が」

「っ！？くそつたれが！」

「殺気を感じてすぐさま後ろに飛び退く。」

「直後、俺のいた場所は爆散。」

「……おいおい、いくらなんでも爆散は無いだろ爆散は。」

「……IS。見たところ奪ったISだな」

「真つ二つにするつもりだったのに。惜しい」

笑いながら惜しいとか言うなよこの野郎。

普通生身の人間にそんなブレードで斬ろうとするか？

こいつ等とはありとあらゆる意味で合わないな。

……だがこれで一気に追いつめられた形になったな。

早く帰って晩御飯の下ごしらえをしなければならぬというのに。

……まずはISの方から眠ってもらおうとしよう。

「残念だけど、ここでお別れね」

再び勢いよくブレードが俺目掛けて振り下ろされるが

「人の気分を害しといてそれはないだろう」

ガシッ！

両手で真剣白羽取りを実行。

そのままIS操縦者の腹に蹴りを入れ、距離を取った。

よし。見事にブレードを止める＆ゲットすることに成功したぞ。

「つく……中々やるわね」

「IS相手に生身はキツイが問題なし。さあ、やろつぜ」

「上等！」

お互いに武器を構え合い、睨みあう。
そのまま数秒の時間が過ぎる。
だが勝負とは急に始まりを見せるものだ。

ギヤリリリリッ！！

お互いの持つブレードが正面からぶつかり合い、つばぜり合う。
その時の勢いで豪快に火花まで散っている。
ちよつと火の粉がかかって熱いが今は目の前に集中せねば。

「だったら！」

「そういう訳にはいかないな！」

ライフルを撃とうとしている所で蹴りを放つ。

間一髪で俺の横を通過。

本当に何でもありだなこの女。

というか残りの二人が完全に空気みたいな感じになっちゃってるし。

「……本当に手強い子ね。しょうがない、アレを使いましょうか」

アレって何だよ、と。

そう心の中で呟いたのと同じタイミングだっただろう。

俺は持っていたブレードごと後ろに吹き飛ばされた。

「（な、何が起こったんだ？）」

「荷電粒子砲を咄嗟にブレードに当てて威力を減らす。さすがね」

「……終わったか。しかし、よく生きてたな」

アレって荷電粒子砲の事かよ。

立ち上がるうとするが先ほどの衝撃で動けない。

そしてそのまま、俺の意識は深い闇へと飲みこまれていった。

まあこんな感じで俺は誘拐されてしまった。

まさか人間相手に荷電粒子砲をぶっ放すなんて。
非常識にも程がある。

しかし一体なぜ俺なんか誘拐しようと思ったんだ？

俺はISなんか使えないというのに。

「そろそろ来る時間じゃないのか？」

「（来る？ 一体誰がこんな所に）」

「良かったわね、もうすぐ来るわよ。……あなたの姉がね」

「っ!!」

ふざけるなよこの野郎！

そんな事をすれば姉さんは失格になって優勝が消える。

そうになったら姉さんの努力はどうなる？

期待してくれている人達の気持ちは？

今まで支えてきてくれた人達の思いは？

駄目だ………それだけは絶対に駄目だ。

俺のせいで姉さんの人生を狂わせてたまるかよ！

「っ！この餓鬼が！」

「（がつ！？）」

腹を思い切り蹴られて呼吸に苦しむ。

すぐに奴らを睨むが、それが今の俺に出来る最大限の事。
悔しくて、惨めで、泣きそうになる。

「ははは。また2年半前みたいに『アレ』が来てくれたらね」

「（っ！……畜生……）」

「来るわけ無いだろ。『アレ』がここに来るなんてよお」

「そうだぜ。大体『アレ』はこいつ等を捨てたんだろ？」

畜生畜生畜生畜生。

俺が弱いせいで、あの人達がバカにされる。

俺に……俺に力が無いから………。

絶望という感情に飲み込まれる。
そう思った時だった。

ドカアアアアアアアアアアンツ！！

巨大な爆発音が耳に聞こえた。

その時の砂埃がこちらまで来て、思わず目を閉じる。

そして、音のした方に目を向けた。

その人は……そこにいた。

「（……来てくれたのかよ、『兄さん』）」

そこにいたのは俺の兄。

現在行方不明扱いを受けていた兄。

そして、俺が姉さんと同じぐらい尊敬する人。

「大丈夫か、一夏。安心しろ。すぐにこいつ等を片付ける」

「嘘だろ……なんでコイツがここに……」

「お前達には手加減などしない。ましてや貴様等に『自由』がある
と思うな」

ズシャアア！ ビチャビチャツ！

たった一瞬で二つの命が絶命した。

兄さんが手に持っているビームサーベルで切り裂いたのだ。
そして辺りに飛び散る肉片。

地面に飛び散ったり溢れたりしている人間の血。
鉄の気分が悪くなるような匂いが辺り一帯に漂う。

でもそれだけでは終わらない。

ISを展開していた女に対しても兄さんは手加減はしない。
いきなり接近したかと思えば右腕を切り落とす。
そしてそのまま頭にライフルを突き付け

「お前が俺を怒らせた。それがお前の『自由』を奪ったんだ」

迷わず引き金を引いた。

その後に訪れたのは言いようのない爆発音だけ。

強い……強すぎる。

そうとしか言いようがない。

あまりにも圧倒的で勝負にすらなっていない。
多分今のままじゃ俺も兄さんの敵になったら
間違いなく、殺されてしまう。

「……まただな。こうやってお前を助けるのは」

俺の口のガムテープをはがし、縄を切ってくれた兄さん。
だが俺は素直に礼を言えない。
今兄さんがやったことが重く心に響く。

「どうだ、お前なりの答えは見つかったか？」

「……まだ見つかって無い。あの時兄さんが言った『強さ』の本当の意味は」

「……そうか。それじゃあ俺はもう行く」

それだけ言って帰ろうとする兄さん。

でも、どうしてもこれだけは言っておきたい。

言わなければならないんだ！

「それでも！人は殺して良いものじゃない！どんな理由があったとしても！」

辺りにこだます俺の声。

兄さんも少しだけ立ち止まり考えるような仕草を見せた。
そして、俺の方に向き直る。

「ならば一夏、お前はその道を行け」

「は？な、何言ってるんだよ兄さん……意味分かんねえよ」

「俺は自分なりの『強さ』の意味を見出し、行動している。お前もお前の『強さ』の意味を見つけて生きていけ。俺が言えるのはここまでだ」

待ってくれよ兄さん！

言った時には、すでに兄さんの姿は無かった。

それから十分後、姉さん達が駆けつけてきてくれた。
その目に涙をためながら俺を強く抱きしめてくれた。

……このままじゃ絶対に駄目だ。

俺はもつと強くならなければならない。

そして……『強さ』の本当の意味を、見つけなければならんだ。

そしてその日の夜に俺はこの街を静かに去った。

もちろん、弾にも姉さんにも、誰にも言わずに去った。

俺が作った四つの機体、MSと

俺達家族3人で取った……最初で最後の、写真を持って。

第1話 決断の夜（後書き）

駄作になるとは思いますが温かく見守ってください。
よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8234y/>

IS インフィニット・ストラトス ~『強さ』の本当の意味~

2011年11月24日16時47分発行